遠藤周作文学全集2　新潮社版

海と毒薬
月光のドミナ

海と毒薬・月光のドミナ
遠藤周作文学全集第二巻

定価一五〇〇円

印刷　昭和五十年三月十五日
発行　昭和五十年三月二十日

著者　遠藤周作（えんどうしゅうさく）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部03（二六六）五一一一
編集部03（二六六）五四一一
振替　東京四―八〇八

印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　新宿加藤製本株式会社

© Shusaku Endō, 1975, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

海と毒薬　5

シラノ・ド・ベルジュラック　149

パロディ　169

月光のドミナ　189

寄港地　235

宦官　253

夏の光　285

松葉杖の男　305

地なり 329
解題 353

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

遠藤周作文学全集　第二巻　小説2

海と毒薬

第一章　海と毒薬

八月、ひどく暑いさかりに、この西松原住宅地に引越した。住宅地といっても土地会社が勝手にきめただけで、新宿から電車で一時間もかかる所だから家かずはまだ少ない。

駅の前を国道が一本、まっすぐに伸びている。陽がカッと路に照りつけている。どこから来るのか知らないが砂利をつんだトラックがよく通る。トラックの上には手拭を首にまいた若い人夫が流行歌を歌っている。

泣いちゃ巻けない出船のいかり……
さすが男よ、笑顔で巻いて

そのたびに黄色い埃が濛々とまき上り、埃がおさまると道の両側から幾軒かの店がゆっくりと浮び上ってくる。右側には煙草屋と肉屋と薬屋とが、左側にはソバ屋とガソリン・スタンドとが並んでいるのだ。そうだ。それから洋服屋もあることを言い忘れていた。洋服屋は、ガソリン・

スタンドから五十米ほど離れた地点にひとつだけポツンと建っているのだが、なぜこんな辺鄙な所をえらんだのかわからない。

トラックがまき上げる埃のために、紳士服御用と書いたペンキも、ショーウインドーの硝子もすっかり白っぽい。ショーウインドーの中には肉色の人形の上半身がおいてある。あやしげな衛生博覧会などによく陳列してある白人の男子人形だ。頭が赤く塗ってあるのは金髪のつもりであろう。高い鼻と青い色の眼をもったその人形は一日中、謎のような微笑をうかべている。

私が引越した月はひどく雨の降らない日が続いた。ソバ屋とガソリン・スタンドをつなぐ畠はすっかり罅割れて、水気を失った玉蜀黍の根の間でキリギリスが乾いたくるしそうな声で喘いでいた。

「こう暑くっちゃ、お風呂にはいりたいけれども」と妻が言った。「お風呂屋も随分、遠いのねえ」

風呂屋は国道を駅の反対側に逆もどりして三百米ほど歩いた所にあるそうである。

「風呂屋も風呂屋だが、医者はいないかね。俺も毎週一回は気胸を入れねばならんし——」

翌日、妻が医院をみつけて来た。風呂屋のすぐ近くに内科と書いた保険医の看板が出ているのを見たと言う。昨年、会社の集団検診で私は左肺の上葉に豆粒大の空洞を発見されたのだ。幸い肋膜が癒着していなかったので肋骨を切らずにすんだが、ここに来る前に住んでいた経堂の医者から半年の間気胸療法を受けていた。だから引越しをすれば、すぐ代りの医者を見つける必要があった。

妻に教えられた道をさがして、その勝呂という医院をたずねてみた。夏の西陽が風呂屋の窓硝子に反射して、近所の百姓たちの家族が入浴に来ているのだろうか、湯をながす音、桶をおく音

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

がかすかに聞えてきた。それはひどく倖せな音のように私には思われた。医院は風呂屋の裏側に赤く熟れたトマト畠をはさんで、すぐわかった。

医院といっても公庫で建てたような小さなモルタル作りの家である。垣根らしい垣根もなく、陽に焼けただれた褐色の灌木をトマト畠との境にしている。まだ夕暮なのになぜか雨戸をしめきっていた。庭にはよごれた子供の赤い長靴が一足、落ちていた。あわれな犬小屋が入口にあったが、犬はいなかった。呼鈴を幾度も押したが誰も出てこない。私は庭にまわった。雨戸を少しあけて、白い診察着を着た男が顔をだした。

「だれ？」

「患者ですが」

「どうしたの」

「気胸をうって頂きたいと思いまして」

「気胸？」

医者は四十位だろうか老けた感じのする男だった。あごを右手でしきりにさすりながら、彼は私をぼんやりと凝視していた。西陽をこちらは背にうけているためか、雨戸をしめきった部屋はひどく暗く、その暗い影のなかでこの男の顔は妙に蒼黒くむくんで見える。

「今まで医者に見てもらったのかね」

「はあ。半年ほど空気を入れてもらいました」

「レントゲンは？」

「家においてきましたが」

「レントゲンがなかとなら仕方がない」

医者は、そう言ったきり、また雨戸をしめきってしまった。私はしばらくジッとそこに、たっていたが、家のなかからはかすかな物音も聞えなかった。

「変な医者だね」と私はその夜、妻に話した。「あれは変な医者だよ」

「患者を選ぶんでしょう」

「そうかも知れんな。それに言葉に妙な訛りがある。レントゲンがなかとなら——か。東京に長くいた人じゃないね。どこか地方から来た医者だ」

「とにかく気胸をいい日に入れて九州へ行って下さいよ。妹の式も九月に迫っているんですから」

「うん」

けれども私はその翌日も翌々日も勝呂医院の所には行かなかった。左肺の空気は少しずつ減ってきて、段々、息ぐるしくなってきたが、あの医者から針をさされるのがなぜか不安なような気がしてきたからだ。

気胸は普通、胸の側面に畳針ほどの太さの針を入れる。針にはゴムのチューブがつけてあって、そこを通る空気が胸に送られて、空洞を少しずつ潰すというのがこの療法なのだ。私にとってこの治療がイヤなのは針を入れられることではなく、その場所が脇の下だということだった。脇の下は平生、腕で防ぎかくしている部分である。腕をあげて気胸針のさされるのを待つ時、私はなぜか、胸の側面にヒヤリとした冷気を感じてしまう。その冷気にはたしかに腕をあげることによって防ぎようのない状態に身をおかねばならぬ不安がまじっているようである。

かよいなれた医者にさえ、針をさされるのがイヤだから新しい医者にたいしては尚更、心もとなかった。下手な人にかかると自然気胸という突発事を起す時がある。自然気胸を起すと患者は

窒息するのだ。私は雨戸から首をだした勝呂医師の何処か蒼黒いむくんだ顔や、暗い陰気な部屋の翳を思いだし、なんだか行く気がしなくなったものである。

とはいえ、いつまでも我儘を言ってはいられない。私の義妹の結婚式が半カ月後、九州のF市であるので、妊娠している妻の代りに出かけねばならなかった。妻は両親のない義妹のたった一人の身寄りなのである。

レントゲン写真を持って行こう、行こうと考えているうちに二、三日たった。

その二、三日後、私ははじめて、ここの風呂屋に行った。土曜日だったから私は午後二時頃、会社から家に戻ってきた。路でトラックに追いこされ白い埃を頭からかぶったのである。

時間が早いせいか湯ぶねのフチに狐のような顔をした男が両手を靠れさせて顎をその上にのせていた。こちらをしばらく見つめていたが、声をかけてきた。

「風呂は今頃がいいやねえ」

「え？」

「風呂は今頃がいいやね。遅くなるとこの辺の百姓の子が湯を汚すからなあ。あいつ等は湯の中で小便をするから、かなわねえ」

私は隅の方で体をかくすようにして細い腕とうすい胸とを洗いながら、この男が駅に近いガソリン・スタンドの主人であるのに気がついた。いつもは腰の所にバンドのある白い作業服を着てホースなどを持っているから、私にはわからなかったのである。女風呂のほうで子供の泣く声がきこえた。

彼は大きな音をたてて湯槽から上った。壁鏡に彼の狐のような顔がうつった。

「ドッコイしょ」と彼は言った。そして桶の上に尻をおいて長い足を洗いはじめた。
「あんたはここへ来て間もないんだろ」
「一週間です。これからお世話になりますよ」
「仕事は何をしている、ね」
「釘の問屋に勤めています」
「会社は東京かね。ここから東京まで通うのは大変だろ」
私は彼の胸に下着の白い痕が残っているのをそっと眺めた。肋骨が少し浮きでてはいるが、いわゆる骨組の逞しい体だ。私のように虚弱な男は同性の体格にたえず劣等観念を抱くのである。マスターの右肩には直径十糎ほどの火傷らしい傷あとがある。その肉のひきつりはカンナの葩のような形をしていた。
「あんたの女房は妊娠らしいなあ」
「はあ」
「この間、駅の方を歩いているのを見たが、随分、くるしそうだったね」
「この辺にいい医者がいますか」
私は勝呂医師でない医者をたずねてみようと思った。私の胸のことは兎も角、妻の体のこともそろそろ心配しなければならない。
「勝呂病院がすぐ、そこじゃないか」
「腕はいいんですか、あの先生」
「悪くないって話だぜ。無口で変った医者でね」
「変っているようですね」

「勘定をあまりやかましく言わねえしな。ほっといても黙っているぜ」
「昨日、行ったけれど雨戸をしめていましたよ」
「そりゃ、カミさんが子供をつれて東京に出たからだろ。カミさんはむかし、看護婦だったそうだがね」
「もう此処に住んでから長いんですか」
「誰が？」
「あの先生」
「でもないだろう。俺んとこよりは、先らしいねえ」
彼の足もとからねずみ色の汚水が流れてきた。体をこすっているその右腕がしきりに私の顔にあたる。赤く上気したその肉塊は湯とシャボンで細長い風船のように光りはじめた。羨ましい。右腕のつけ根でさっきの火傷の痕が少し白くふやけてきたようにさえ見える。
「火傷ですか。それは」
「なに？　これか。迫撃砲だよ。中支でね、チャンコロにやられてね。名誉の負傷さあ」
「痛かったでしょう」
「痛いの、痛くないのじゃないね。真赤に焼いた鉄棒で思い切り、ガアンと撲られた気持さ。あんたは兵隊にとられたのかい」
「終戦前――一寸。すぐ帰りました」
「ふん。じゃああのチャンコロの迫撃砲の音を知らないな。シュル、シュル、シュルと鳴りやがって、さ」
私は自分が応召した鳥取の部隊を思いだした。うす暗い内務班でこのマスターと同じ型の狐の

ような顔をもった男が幾人も坐っていた。私たち新兵を苛める時、彼等の細ながい象のような眼はまるで微笑でもしているようだった。あの男たちも今はどこかでガソリン・スタンドの主人になっているかもしれない。

「中支に行った頃は面白かったなあ。女でもやり放題だからな。抵抗する奴がいれば樹にくくりつけて突撃の練習さ」

「女を？」

「いや、男さ」

彼は頭にシャボンをつけて、こちらに顔をむけた。はじめて私の白い痩せた胸や細い腕をみたように、ふしぎそうな眼つきをした。

「痩せているな、あんたは。その腕じゃ人間を突き刺せないね。兵隊では落第だ。俺なぞ」と言いかけて彼は口を噤んだ。「……もっとも俺だけじゃないがなあ。シナに行った連中は大てい一人や二人は殺ってるよ。俺んとこの近くの洋服屋――知っているだろう、――あそこも南京で大分、あばれたらしいぜ。奴は憲兵だったからな」

どこかでラジオの流行歌が聞えてきた。あれは美空ひばりの声である。女湯ではまた子供が泣いている。

体をふいて「お先に」と言った。脱衣場の所で一人の男がうしろむきになってシャツをぬいでいた。勝呂医師だった。彼は眼をしばたたきながら私を眺めたがすぐ視線をそらした。先日のことを覚えているのか、覚えていないのかわからない。午後の陽が医師の額にあたって、そこに小さな汗粒が幾つも浮いていた。トマト畠の中を通って帰った。キリギリスがあちらこちらで、かすれた声をあげて鳴いている。それを聞いているのはひどく息苦しかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook